

Japanese Society of Oncology Pharmacy Practitioners

JSOPP

NEWS
LETTER vol.01

JSOPPニュースレター 発刊にあたって

がん研究会有明病院薬剤部
日本がん薬剤学会 代表理事
濱 敏弘



『日本がん薬剤学会(Japanese Society of Oncology Pharmacy Practitioners: JSOPP)は、2009年にInternational Society of Oncology Pharmacy Practitioners (ISOPP)に連携する組織として設立されました。本学会はこれまで、最新のがん薬剤学領域の情報を交換する場を提供することと、がん患者が高質で、安心・安全ながん薬物療法を受けることができるように、がん薬物療法に関わる実務者、研究者の資質向上を図ることを目指して活動してまいりました。

これまで本学会では、NIOSH アラートの翻訳、ISOPP スタンドアードの翻訳活動などを通して抗がん薬の職業曝露に関する啓蒙と、抗がん薬の被曝対策に対する閉鎖式接続器具の有効性の検証と診療保険点数化に協力してきました。また、がん薬物療法に従事する薬剤師の安全性safe Handlingという実践的な研究分野に特化した学術活動を展開してきました。

今年は、関西医科大学香里病院薬剤部の河野えみ子先生に、第9回日本がん薬剤学会学術大会会長をお願いし、2017年5月14日に盛会裏に終了することができました。

また、抗がん剤曝露の環境設定は、各施設がバラバラの基準で測定していて、横並びに評価ができないのが現状です。そこで、この学会で、測定するサイズ、場所などの標準化を進め、それぞれの会員が測定したデータを、この学会で集め、評価をしてフィードバックをしていきたいと考えています。秋ごろに、抗がん剤曝露の環境測定について、セミナー開催を予定しています。

今年から事務局体制も新たになり、“JSOPPニュースレター”を発刊することになりました。がん化学療法に関わる最新情報の共有と活発な意見交換する場となることを期待しています。

編集・発行：
一般社団法人日本がん薬剤学会 (JSOPP)
事務局 株式会社コンパス内
〒113-0033
東京都文京区本郷三丁目3番11号NCKビル5階
TEL 03-5840-6131 FAX 03-5840-6130
office@jsopp.net http://jsopp.org/

第9回日本がん薬剤学会学術大会を振り返って

関西医科大学香里病院 薬剤部
第9回日本がん薬剤学会学術大会 会長
河野えみ子



2017年5月14日、関西医科大学学舎(大阪府枚方市)にて、第9回日本がん薬剤学会学術大会を開催致しました。300名にせまる多くの先生方にご参加を賜り、厚く御礼申し上げます。

本大会のメインテーマは、「がん治療を支えるために今なにができるか」としました。現在のがん治療では抗がん薬の曝露対策をはじめ、抗がん薬の適正使用など薬剤師が果たすべき業務は多種多様であり、臨床現場で活かせる有意義な内容となるようにプログラムを企画致しました。

曝露対策のセッションでは、シンポジウム1『抗がん薬曝露対策の現状と将来』と題して、中山季昭先生、中西弘和先生、濱宏仁先生からガイドラインの解説、曝露対策のために行う研究、さらに病院における対策についてご講演を頂きました。総合討論では司会の濱敏弘先生に総括をして頂き、適切な曝露対策の重要性についてより理解が得られました。併せて海外招聘講演では、Corbin Bennett PharmD, MPHをお招きして『Safe Handling of Hazardous Drugs』についてご講演を頂き、米国での取り組みが紹介されました。

がん治療に関するセッションとして、教育講演『より安全に化学療法を継続するために』では、清原祥夫先生より免疫チェックポイント阻害薬を含む抗腫瘍薬の各種皮膚障害についてご講演を頂き、予防対策・早期治療の重要性を再認識しました。向井幹夫先生からはがん治療における血管新生阻害薬と心血管毒性など注目される副作用のご講演を頂きました。今村知世先生からはスペシャルポピュレーションに対する腎障害患者への用量調節の考え方についてご講演を頂き、有効性と安全性を確認してがん化学療法を継続する

ことの重要性を再認識しました。シンポジウム2『肺癌セッション』では、倉田宝保先生からは分子標的治療薬と免疫チェックポイント阻害薬を中心に肺がん治療全般について基調講演をいただきました。藤原季美子先生からは化学療法における薬剤師の役割、吉野真樹先生からはがん免疫療法における免疫関連有害事象(irAE)マネジメントについてご講演を頂きました。総合討論では司会の谷川原祐介先生に総括をして頂き、肺癌治療の最新の情報、新規の副作用情報が共有できました。

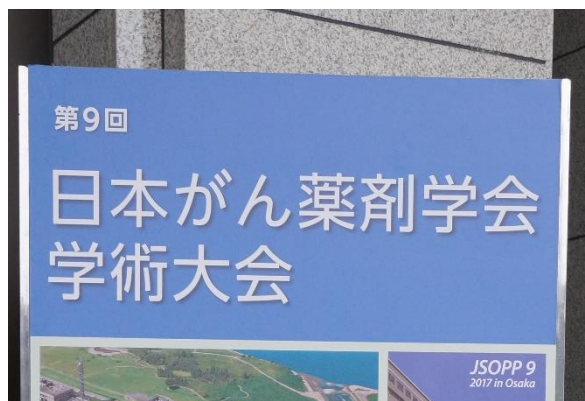
学術セミナー(ランチョンセミナー)では室圭先生より『大腸がん薬物療法の実践 ～各種ガイドラインをどう使う?～』、今田和典先生より『造血器腫瘍(血液がん)治療における医師の役割について』をご講演して頂きました。

日本医療薬学会共催セミナー『がん専門薬剤師になるための50症例書き方』では、平成28年度がん専門薬剤師認定制度委員会優秀症例賞を受賞されました飯原大稔先生、今井千晶先生、中本恵理先生、鍛冶園誠先生から薬学的介入事例についてご講演を頂きました。

今大会にご参加下さいました皆様にとりまして貴重な時間となり、今後の業務に活かして頂ければ幸いと存じます。

最後になりましたが、無事盛会のうちに終えることができましたのも、ひとえに格別にご教示賜りました谷川原祐介先生、濱敏弘先生をはじめ、講師の先生方、座長の労をお取り頂いた先生方、関係者皆様のご支援、ご協力の賜物と深く感謝申し上げます。

第9回日本がん薬剤学会学術大会を振り返って



第9回日本がん薬剤学会学術大会を振り返って



第9回日本がん薬剤 学会学術大会に 参加して

テルモ株式会社
中北 香子



2017年5月14日(日)関西医科大学香里病院薬剤部河野えみ子先生を学会長に、関西医科大学学舎で開催された「第9回日本がん薬剤学会学術大会」に参加しましたので、報告します。当日は全国から約300名の先生方が集まり、抗がん薬曝露対策の話題やがん専門薬剤師になるための50症例の書き方など盛り沢山の内容が活発に議論される盛況な学術集会となりました。その中からシンポジウム「抗がん薬曝露対策の現状と将来」について下記にまとめます。

シンポジウム1 抗がん薬曝露対策ガイドラインの現状と将来

座長:濱敏弘先生(がん研究会有明病院 薬剤部)

石丸博雅先生(聖路加国際病院 薬剤部)

演題① 抗がん薬曝露対策ガイドラインの現状と将来

演者:中山季昭先生(埼玉県立小児医療センター 薬剤部)

2015年に発刊された『3学会合同曝露対策ガイドライン』

は2018年に改訂予定である。今シンポジウムの時点では、GL改訂草案がまだできていないが、2015年版の内容と、予想される改定内容について紹介する。

ガイドラインは、基本的にEBMの手法に基づいて作成している。2015年以降登場したエビデンスも組み入れながら、改訂を進めていく。

調製関連では、エビデンス次第ではフィルター式の調製器具でも曝露対策の効果が十分得られるという内容になるかもしれない(フィルター式であっても、気化薬剤の曝露量は目標レベルに抑えられるため)。ただし、漏出はゼロにはならない認識が必要。ゼロにならないのは、CS TDでも同様であり、適正にリスクを理解したうえで各医療機関で検討することを推奨する形になるのではないかな。

投与関連では、エビデンスの蓄積が進み、またUSP800の記載もあることから、ガイドラインに、投与時の対策として閉鎖式接続器具の使用が推奨される可能性が高い。ガイドラインは作成時点での内容でしかないため、より有効な曝露対策をマネジメントすることを目指すことが重要である。



演題② 抗がん剤曝露対策のために行う研究について

演者：中西弘和先生（同志社女子大学 薬剤部）

日本における抗がん剤曝露の実態は、2011年に医療従事者が抗がん剤で汚染されている実態を明らかにした報告がされたことに始まる。その後、抗がん剤による環境曝露、医療従事者の曝露、患者家族の曝露など多くの報告がされた。これらにより曝露対策の必要性は明らかになったが、実施に対策が有効であるかどうか、中西先生が大学で実施された研究について紹介された。

- ・閉鎖式接続器具には、液滴が課題になる器具もあるが、液滴量は $0.2 \sim 0.6 \mu\text{L}$ で、CPAであれば $4 \sim 14 \mu\text{g}$ に相当する。閉鎖式接続器具を用いずに曝露した場合、もっと大量の抗がん剤の曝露となるため、閉鎖式接続器具の使用が望ましい。

- ・抗がん剤投与ルート置換のための生食は、50mLではまだ抗がん剤が残る結果が出たが100mLでは検出されなかった。

- ・安全キャビネットは100%排気でも、独立配管でないと施設内に抗がん剤が流れていたという報告もある。抗がん剤分離機能付き安全キャビネットを産学共同で進めている。

等、様々な研究結果が得られている。

演題③ 病院における抗がん剤曝露対策

「～バイアルに起因する汚染と調製時のCSTD使用の有用性～」

演者：濱宏仁先生（神戸市立医療センター西市民病院 薬剤部）

USP800には、「除染」の項目があり、「安全キャビネット内に混入するハザードスドラッグ（HD）の量は、HDの容器を拭き取ることで低減できる」と記載されている。バイアルのジェットウォッシャーを用いた洗浄で表面汚染が除去できることが報告されているが、水に浸漬し流水化で洗浄するだけでも大部分の除染できる可能性が示唆されている。

調製時のCSTDにはいろいろなタイプが市販されているが、フィルタータイプでは、気化した抗がん剤が漏出してしまうイメージがあるが、 40°C 環境で調製したところ、抗がん剤汚染除去効果が十分にあることが確認できた。この結果は、医療薬学会で詳細に報告する予定。

各シンポジストの口演後、「曝露対策のゴールはどのように設定するか」「曝露の現状について、JSOPPを通じてモニタリング方法を標準化できないか」というテーマについて、会場の参加者を交えて意見交換も行われました。

中西先生の口演の中では、JSOPPの母体であるISOPPの成立ちについて「1986年にニュージーランドのH.Mckinnon 女史が構想し、がん領域における薬剤の適正化に向けて組織された」との紹介がありました。まさに、紹介したシンポジウムはじめ、がん領域における薬剤使用の適正化につながる学術集会であったと感じます。

第10回学術大会 開催のお知らせ

第10回日本がん薬剤学会(JSOPP)学術大会

日 時:2018年5月13日(日)

会 場:東京コンベンションホール

大会長:吉村知哲

(大垣市民病院 薬剤部)

テーマ:安全・安心ながん医療への貢献

大会事務局

大垣市民病院 薬剤部内

〒503-8502 岐阜県大垣市南瀬町4

TEL 0584-81-3341 FAX 0584-77-0854

第10回
日本がん薬剤学会 (JSOPP)
学術大会

安全・安心ながん医療への貢献

開催日: 2018年5月13日(日) 9:30~16:30

場 所: 東京コンベンションホール
東京都中央区京橋3-1-1 東京スクエアガーデン5F

大会長: 吉村知哲 (大垣市民病院 薬剤部長)

主 催: (一社) 日本がん薬剤学会 (JSOPP)

大会事務局
大垣市民病院 薬剤部内
〒503-8502 岐阜県大垣市南瀬町4丁目86
TEL 0584-81-3341 FAX 0584-77-0854

運営事務局
株式会社メディセオ 学会支援部
〒104-8464 東京都中央区八重洲2丁目7-15
TEL 03-3517-5519 FAX 03-3517-5186

抗エストロゲン剤 / 閉経後乳癌治療剤

薬価基準収載

フェソロデックス®筋注250mg

FASLODEX® Intramuscular Injection 250mg フルベストラント注射剤

劇薬 / 処方箋医薬品[※]
注) 注意—医師等の処方箋により使用すること

効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については、製品添付文書をご参照ください。

製造販売元(資料請求先)
アストラゼネカ株式会社
〒530-0011 大阪市北区大深町3番1号
メディカルインフォメーションセンター ☎ 0120-169-115

AstraZeneca

2017年3月作成

学会員募集のお知らせ

一般社団法人日本がん薬剤学会(JSOPP)では、本学会の活動に賛同していただける会員を募集しています。

謹啓

日本がん薬剤学会(Japanese Society of Oncology Pharmacy Practitioners:JSOPP)は、2009年にInternational Society of Oncology Pharmacy Practitioners (ISOPP)に連携する組織として設立され、2012年には一般社団法人化いたしました。

本学会は、最新のがん薬剤学領域に関する情報交換ができる場を提供することで、がん薬物療法に関わる実務者、研究者の資質向上を図り、がん患者の生活の質の向上、すなわち、高質で、安心・安全ながん薬物療法の提供を目指して活動してまいりました。

がん患者の数は年々増加傾向にあり、チーム医療の重要性が問われる中、本学会が、職種を問わず、がん薬物療法にかかわるすべての実務者および研究者の情報交換の場となり、高質ながん治療の提供につながることを願ってやみません。

◆事業内容

- ・ 学術大会の開催
- ・ 抗悪性腫瘍調製ガイドラインの策定
- ・ がん薬剤学会領域における多施設共同研究の推進
- ・ がん薬剤学領域における実務家、研究者の教育
- ・ 関連学術団体との連携および協力
- ・ その他、この法人の目的を達成するために必要な事業

薬剤師だけではなく、医師、看護師、栄養士など職種を問わず、がん薬物療法に関わるすべての実務者、及び研究者の皆さまに、本学会へ御入会いただきますようお願い申し上げます。

謹白

一般社団法人日本がん薬剤学会(JSOPP)
代表理事 濱 敏弘

会員の申込は、
本学会のホームページ (<http://jsopp.org/>) より随時受け付けています。
なお、年会費は、個人5,000円、賛助会員1口50,000円(1口以上)です。

オンコテイン™バイアル

医療関係者の皆様のご意見に応じて改善され、進化するオンコテイン™バイアル

改良点 ①

シリンジや点滴容器などに
貼り替え可能な
バイアルキャップシール

改良点 ②

容器内の薬剤が見えやすい
バイアルラベル

改良点 ③

取り出しやすく、かさ張らずに
容易に廃棄できるバイアル個装箱



日本初※ の曝露対策バイアル: オンコテイン™が**3**つのリスクを軽減します



医療関係者が一目で中身を確認でき、取り扱いにも優れたガラス製のバイアルを採用しています。



一つ一つのバイアルを複数のジェット噴水で洗浄し、残留抗がん剤による曝露リスクを軽減します。



耐破損性に優れたプラスチック製台座により、搬送時・落下時のバイアル破損のリスクを軽減します。



プラスチック被覆でバイアルをシュリンク包装。表面に付着した残留物との接触を防ぐと共に、バイアル破損時のガラス片や薬剤飛散のリスクを軽減します。

※2010年7月承認品目より曝露リスクを軽減するために開発されたオンコテイン™バイアルが適用されました。



持田製薬株式会社
東京都新宿区四谷1丁目7番地
TEL 0120-489-522(※1相談窓口)



ファイザー株式会社
〒151-8589 東京都渋谷区代々木3-22-7

EPD72H001A

2017年4月作成